



〈雑録〉西洋新著論文梗概 : アッシュレー『物價ノ騰貴』(2)

坂西, 由藏

(Citation)

経済學商業學國民經濟雜誌, 11(3):485*-498

(Issue Date)

1911-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051775>



西洋新著論文梗概

商學士 坂西由藏

アッシュレー『物價ノ騰貴』(其二)

第二節 物價騰貴ノ原因

(一)前節ニ舉ゲタヤウナ物價ノ著シキ騰貴ハ何ニ因ルノデアルカ。諸國ノ統計ヲ比較シテ考ヘテ見レバ、物價ノ騰貴ガ決シテ箇々ノ國ニノミ

限ラレタ原因ニ基ク現象デナイコトハ明カデア
ル。例ヘバ獨逸ニ於テ社會主義者ハ食料品騰貴
ノ原因ヲ保護關稅政策ニ歸シテ之ヲ攻撃シテ居
ル。米國ニ於テ「トラスト」ハ同ジ理由カラシテ
國民ノ嫌惡ヲ招イテ居ル。成ル程、食料品ノ騰
貴ガ、獨逸ニ於テハ幾分カ保護政策ノ爲メ、米
國デハ幾分カ「トラスト」ノ爲メデアルカモ知レ
ヌガ、之ヲ以テ其ノ唯一ノ原因ト看倣スコトハ
出來ヌ。何トナレバ、保護關稅ノナイ英國、「ト
ラスト」ハ在ツテモサシテ重要デナイ英國ニ於
テモ、物價騰貴ノ現象ハ存スルカラデアル。併
シ本論ニ於テハ、外ノ國ノ狀態ヲ究メヤウトス
ルノデハナク、英國ニ起ツタ十八%〔現今ニ於
テハ二〇—二三%〕ノ物價騰貴ノ理由ヲ説明セ
ヤウトスルノデアアル。

(二) 物價騰貴ノ一般の原因ヲ究ムルニ先ダチテ
其ノ特殊原因——特殊商品ノ需要供給ノ關係ノ變
化——ノ存スルヤ否ヤヲ考ヘテ見ナケレバナラヌ。

先ヅ最重要ノ商品タル小麦ニ就テ見レバ、物
價ノ變動ガ主トシテ小麦ノ供給減少ニ依テ説明
ハ出來ル年モアル。即チ、世界ニ於ケル小麦ノ
收穫ハ、一九〇六年ニハ未曾有ノ巨額ニ達シタ
ガ、其翌一九〇七年ニハ著シク減少シタ。シカ
モ、夫レト時ヲ同フシテ其ノ價ハ騰貴シタノデ
アル。殊ニ其ノ騰貴ノ顯著ナノハ一九〇九年デ
アル。此ノ年ニハ世界ニ於ケル小麦ノ產額ガ減
ジタ譯デハナイガ、英國ニ於テハ一時其ノ供給
ノ減少ヲ見タ。ソレハ、米國ヨリノ小麦輸送高
ガ減ジタカラデアツテ、之ガ爲メニ生ジタ不足
ハ結局、露國、印度及濠洲ヨリノ輸入ニ依テ補
ハレタガ、此輸入タルヤ畢竟同年夏期ニ於ケル
著シキ價ノ騰貴ニ促ガサレタ現象ニ外ナラヌノ
デアアル。

斯ノ如ク供給高ノ増減ガ市價ノ變動ヲ來シタ
原因ト見ルコトノ出來ル年モアルガ、シカモ最
近七年間ニ於ケル騰貴ガ單ニ需要ノ供給ニ超過

セルガ爲ニ起ツタモノト斷ジ去ルコトハ出來ナイ。蓋シ世界ニ於ケル小麥ノ產額ハ時々ノ變動ハアツタガ、小麥消費者ノ増加ニ伴フテ得ナイ様ナ事ハ先ヅ無カツタト云ヘル。信賴スルニ足ル計數ニ據レバ小麥ノ貯藏高ハ一八八八—九〇年ニハ平均約二億八千百萬「クオート」デアツタガ、一九〇六—八年ノ平均ハ約四億〇六百萬「クオート」ニ達シテ居ル。又 Board of Agriculture ノ計算ニ據レバ、一九〇八年ニ全世界ニ於テ小麥栽培ニ利用セラレタ土地ノ面積二億四千萬「エーカー」ノ中デ、四千五百萬「エーカー」ハ夫レ以前ノ十五箇年間ニ増シタ部分デアル。更ニ一年々々ニ就テ見テモ、供給ノ増減ニ依テ市價ノ變動ヲ説明スルヲ得ナイコトガ少クナイ即チ、レイトン (Layton) ガ近ク Journal of the Royal Agriculture Society ノ誌上ニ掲ゲタ統計ハ次ノ通りデアル。(コレハ米國 Department of Agriculture ノ計算ニ基イタモノデアラウ。)

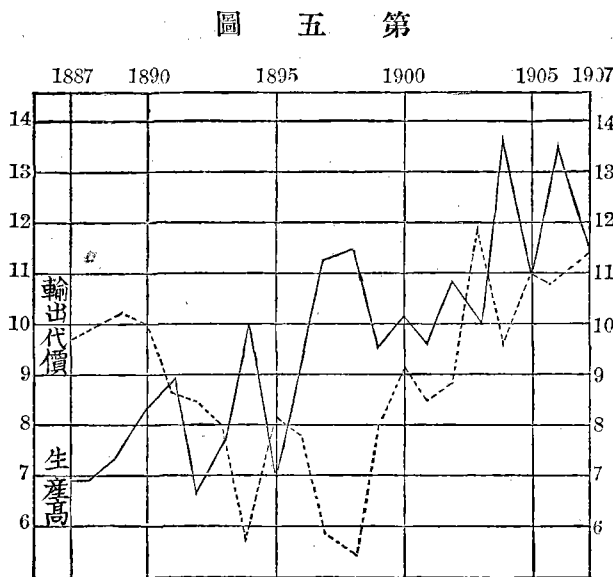
(第六表) 世界ニ於ケル小麥ノ產額

年次	百萬クオ 一ター	年次	百萬クオ 一ター
一八八八	二八三	一九〇九	三二八
一八八九	二七三	一九一〇	三三二
一八九〇	二八八	一九一〇—	三四七
一八九一	三〇九	一九〇二	三九六
一八九二	三一四	一九〇三	四〇七
一八九三	三一九	一九〇四	三九五
一八九四	三二七	一九〇五	四一六
一八九五	三〇五	一九〇六	四二九
一八九六	二九八	一九〇七	三九三
一八九七	二八六	一九〇八	三九七
一八九八	三六六		

即チ一九〇二年ニモ、一九〇五年ニモ、生産高ハ増加シタガ價ハ却テ騰貴シタ。之ニ反シテ一八九九年ニハ生産高ハ減少シテ而モ價ハ下落シタ。

(三) 次ニ衣類ノ最モ重ナル原料タル棉花ニ就テ見レバ、一九〇四年ト一九〇九年トニ於テ特ニ高價ナル月ガアツタガ、之レハ「リング」ノ出來タ結果デアル。此場合ニ投機者ガ「リング」ヲ形作ルコトヲ得タ所以ハ、亞米利加ニ於テ棉花不作

ノ年ガ續イタ爲メデアルノハ疑ヲ容レナイ。次ニ掲グル野線ヲ見レバ米國產棉花ノ價ト其生産高トノ間ニ頗ル密接ナル關係ノアルコトガ分ル。



此ノ野線圖ハ米國 Department of Agriculture ノ公ニシタ計數ニ基イテ作成シタノデアルガ、之ヲ生産高ハ五〇〇封度入百萬「ベールズ」ヲ單位トシテ表ハシ、輸出代價ハ一「封度」ニ付「セント」ヲ單位トシテ表ハシタモノトシテ見ルコトガ出來ル。之ニ據テ、一八九四年、一八九八年、一九〇四年及ビ一九〇六年ニ於テ其ノ價ト生産高トノ間ニ如何ニ密接ナル關係ノ存スルカハ分ル。ソレカラ年々ノ變動ハ無論アルガ、一八九八年以來米國棉ノ價ガ次第ニ上騰シツ、アルコトモ分ル。ランカシアノ専門家ノ意見ニ據レバ、時々ノ例外ハアルガ、米國棉ハ多少慢性的ノ供給不足ヲ見ルニ至ツタト云フコトデアル。但シ米糧ノ生産高ガ比例的ニモ減少シタト云フコトハ決シテ確カデハナイ。米國農務省ノ計算ニ據レバ、一九〇八年ニ終ル五年間ノ平均生産高ハ一八九六年ニ終ル五年間ノ平均生産高ニ比シテ五十三%ノ増加ヲ來シテ居ル。唯、乍併、米國ニ

於テモ歐洲大陸諸國ニ於テモ近時棉業ノ發達ハ誠ニ著シイモノガアルノデ、英國ハ原料購買者トシテ多クノ競争者ヲ有スルニ至ツタノデアル即チ原棉消費高ハ一八九一—九五年ト一九〇六—〇八年トノ二期ヲ比較シテ見レバ英國デハ一五七九百萬封度カラ一八八七百萬封度ニ上ツテ居ルニ對シテ、米國デハ一二六一百萬封度カラ二二一九百萬封度ニ、歐洲大陸諸國デハ一九〇六百萬封度カラ二八七七百萬封度ニ上ツテ居ル(四)更ニ肉類ニ就テ見レバ、其市價ガ人爲ノ勢力ニ依テ左右セラル、事、棉花ノ場合ヨリモ更ニ大ナリトセラレテ居ル。近時米國ニ於テ攻撃ノ標的トナツテ居ル肉類「トラスト」ノ功罪ハ今詳論スルノ遑ガナイガ、茲ニ一九〇二年ニ於ケル肉類ノ價ノ騰貴ニ關スル二ツノ統計ガアル。

一ハ米國ノ Department of Labor ガ一九〇二年ニ行ツタ調査デ、他ハ米國ノ Bureau of Corporations ガ一九〇五年ニ行ツタ調査デアル。而シ

テ其ノ研究ノ結果ハ共ニ、一九〇一年夏期西部地方ニ於ケル不作ノ爲メニ飼料ガ五十%モ騰貴シ、從テ食料用家畜ノ供給ノ減少シタコトガ、一九〇二年ニ於テ肉類ノ價ノ甚シキ騰貴ヲ惹起シタ原因デアアルトナシテ居ル。

予ノ知ル限りニ於テハ、米國ニハ一九〇五年以來之ニ關シテ信賴スルニ足ルベキ調査ハ行ハレテ居ナイ。所ガ一九〇八年米國竝ニ英國ニ於ケル肉ノ價ノ騰貴ハ、英國ノ商務局ヲシテ特ニ調査委員ヲ舉グルニ至ラシメタ。同委員ハ精細ナル研究ノ結果次ノ如ク報告シタ。曰ク「一九〇八年ノ中頃ニ於ケル肉ノ市價ノ騰貴ハ米國商人ノ人爲的手段ニ基イテ起ツタノデハナク、全ク肉類ノ供給減少ノ結果デアアル。肉類ノ供給減少ノ原因ハ食用家畜ノ不足デアアル。而シテ此事タルヤ蓋シ一九〇七年ニ於ケル恐慌ニ際シ農夫ガ充分發育シテ居ナイ家畜ヲ市場ニ出スノ必要ニ迫ラレタコトニ原因スルデアラウシ、ソレニ飼

料ノ價ノ騰貴モ之ヲ助長シタモノト云ヘルト。
 現ニ英國デハ「ペーコン」ノ價ガ非常ニ騰貴シ
 テ居ル。其ノ價ガ一九〇九年及ビ一九一〇年ニ
 於テ俄ニ上騰シタノハ輸入ノ減少ニ基クモノデ
 アル。即チ一九〇九年ニ於ケル豚肉ノ輸入高ハ
 六、〇〇〇、四〇〇 Cwts. デアルガ、ソレ以前ノ
 輸入高ハ七、七五〇、〇〇〇 Cwts. ニ達シテ居ッ
 タ。「ペーコン」ハ價ノ騰貴ハ此頃特ニ目ニ立ッ
 現象デアルガ、其ノ傾向ガ既ニ十數年前カラ起
 ヲテ居ルコトハ、商務局ノ調査ニ係ル次表ヲ見
 レバ明カデアル。

(第七表)「ペーコン」市價ノ變動

(一九〇〇年ノ指數=一〇〇)			
年次	輸入「ペーコン」於ケル小賣相場	年次	輸入「ペーコン」於ケル小賣相場
一九〇五	九三三	一九〇六	八六六
一九〇六	八二七	一九〇七	八五八
一九〇七	八四九	一九〇八	九一八
	一〇〇〇	一九〇九	一〇〇〇

一九〇一 二二六 一九〇二 二二五 一九〇三 二二八 一九〇四 二四四 一九〇五 二五五 一九〇六 二六六 一九〇七 二七五 一九〇八 二八八 一九〇九 二九九 一九一〇 三〇〇 一九一一 三〇一 一九一二 三〇二 一九一三 三〇三 一九一四 三〇四 一九一五 三〇五 一九一六 三〇六 一九一七 三〇七 一九一八 三〇八 一九一九 三〇九 一九二〇 三一〇 一九二一 三一〇 一九二二 三一〇 一九二三 三一〇 一九二四 三一〇 一九二五 三一〇 一九二六 三一〇 一九二七 三一〇 一九二八 三一〇 一九二九 三一〇 一九三〇 三一〇 一九三一 三一〇 一九三二 三一〇 一九三三 三一〇 一九三四 三一〇 一九三五 三一〇 一九三六 三一〇 一九三七 三一〇 一九三八 三一〇 一九三九 三一〇 一九四〇 三一〇 一九四一 三一〇 一九四二 三一〇 一九四三 三一〇 一九四四 三一〇 一九四五 三一〇 一九四六 三一〇 一九四七 三一〇 一九四八 三一〇 一九四九 三一〇 一九五〇 三一〇 一九五一 三一〇 一九五二 三一〇 一九五三 三一〇 一九五四 三一〇 一九五五 三一〇 一九五六 三一〇 一九五七 三一〇 一九五八 三一〇 一九五九 三一〇 一九六〇 三一〇 一九六一 三一〇 一九六二 三一〇 一九六三 三一〇 一九六四 三一〇 一九六五 三一〇 一九六六 三一〇 一九六七 三一〇 一九六八 三一〇 一九六九 三一〇 一九七〇 三一〇 一九七一 三一〇 一九七二 三一〇 一九七三 三一〇 一九七四 三一〇 一九七五 三一〇 一九七六 三一〇 一九七七 三一〇 一九七八 三一〇 一九七九 三一〇 一九八〇 三一〇 一九八一 三一〇 一九八二 三一〇 一九八三 三一〇 一九八四 三一〇 一九八五 三一〇 一九八六 三一〇 一九八七 三一〇 一九八八 三一〇 一九八九 三一〇 一九九〇 三一〇 一九九一 三一〇 一九九二 三一〇 一九九三 三一〇 一九九四 三一〇 一九九五 三一〇 一九九六 三一〇 一九九七 三一〇 一九九八 三一〇 一九九九 三一〇 二〇〇〇 三一〇

而シテ其ノ原因ハ矢張り輸入ノ減少デアル。
 一九〇九年ニハ米國及カナダヨリノ輸入ガ俄ニ
 減ジタガ、ソレハ夫レ以前ヨリ引續イタ現象デ
 アル。農務局ノ調査ニ據レバ豚肉輸入高ハ一八
 九八—一九〇二年ノ平均ハ凡ツ八百五十萬 Cwts.
 デアツタガ、一九〇二—三年ノ平均ハ七百五十
 ナリ、爾來一九〇八年マデハ七百五十ト七百五十
 萬ノ間ヲ昇降シテ居ツタ。

(五) 最後ニ説明ヲ要スル商品ハ近時特殊ノ事情
 ニ基イテ價ノ變動シタ「ゴム」デアル、其ノ價ノ
 近頃騰貴シタ重ナ原因ハ供給ノ減少デハナクシ
 テ、「ゴム」ヲ原料トスル工業ノ發達ノ爲メニ其
 ノ需要ガ俄ニ増進シタカラデアル。

(六) 以上列舉シタ特殊原因ヲ以テ近時平均物價
 ガ一般ニ上騰シタ所以ヲ充分ニ説明スルコトガ

出來ルカト云フニ、予ハシカ信ズルコトヲ得ナイ。何トナレバ、市價ノ騰貴ハ單ニ前掲數種ノ物品ニノミ限ラレテ居ナイカラデアル。サウア一ベツクノ統計ニ於テ所謂『其他ノ原料品』(此ノ中ニハ「ゴム」ヲ含マナイ)ノ價ガ『動物性食料品』ノ價ニ劣ラズ騰貴シテ居ル。『礦物』鐵、石炭ヲ含ム)ノ價ハ更ニ大ニ騰貴シテ居ル。此ノ外尙ホ一九〇九年商務局調査ニ係ル四十五種ノ商品ノ卸賣相場ヲ參照スベキデアル。一九〇〇年ノ前後ヲ比較スレバ、價ノ下落シタノハ茶ト珈琲ト葡萄酒ダケデ、價ノ變動シナカツタモノガ少シアルガ、大多數ノ商品ノ價ハ目立ツテ騰貴シテ居ルコトガ分ル。是ニ於テ如上ノ物價ノ一般の騰貴ノ現象ヲ惹起シタ一般的原因ガアルト云ハザルヲ得ス。

(七)物價騰貴ノ一般的原因ノ一ト看做スベキモノハ經濟界ニ於ケル活氣ノ上進デアル。貨幣ハ計算ノ單位ヲ供スルニ過ギナイカラ、賣ル品物

ニ對シ二倍ノ價ヲ得テモ、買フ品物ニ對シ二倍ノ價ヲ支拂フモノデアレバ、結局物價騰貴ニヨリ何人モ利益ヲ得ルモノハナイ筈デアル。併シ人ハ普通ニ、ソウ哲理的ニ考ヘルモノデハナイ物價ノ下落ガ特別ノ理由ナクシテ一般ニ人氣ヲ損スルニ反シ、其ノ騰貴ハ少クトモ其ノ傾向ガ生ジテ未ダ一般の現象トナラナイ間ニ於テハ經濟界ニ活氣ヲ喚ビ起スヲ常トスル。故ニ物價ノ騰貴ハ或ル程度マデ好機運ノ原因タリ、又結果タルモノデアル。若干ノ物品ノ市價ガ騰貴スレバ企業心ハ勃興シ、事業界ガ活躍ノ氣ヲ帶ビテ來ルト更ニ他ノ商品ノ需要ガ増シテ其ノ價ガ亦騰貴スル。此ノ如ク、物價ト一般經濟狀態トノ間ニ存スル相互的作用ハ次ノ野線圖ニ於テ著シク現ハレテ居ル。

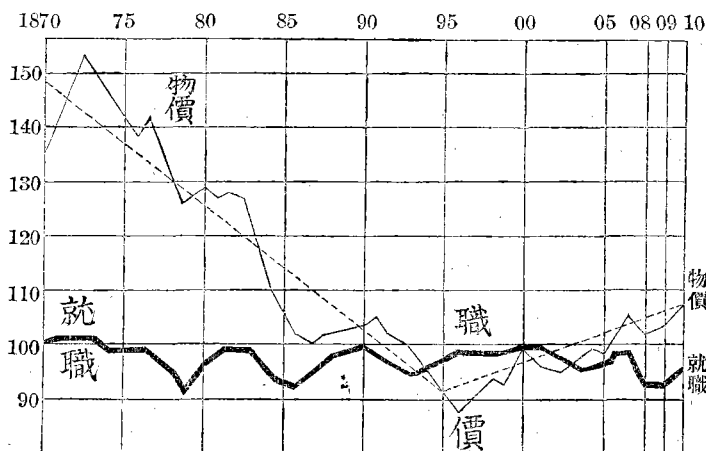
此圖ニ於テハ商務局ノ調査ニ係ル卸賣相場ノ變動ヲ示ス野線圖(前號一二三頁所載第四圖)ト、同局ノ調査ニ係リ一九〇八年マデニ勞働者

ノ得タ職業ノ増減ヲ示スベキ指トヲ對立セシメテアル。此ノ就職指數モ亦一九〇〇年ヲ以テ基本ト立テ、アルガ、之レニ依テ、不充分乍ラ勞働市場ニ於ケル年々狀況ノ變動ノ一般ヲ察知スルコトガ出來ル。而シテ此ノ就職數ノ増減ハ、ヤガテ經濟界ニ於ケル年々活氣ノ一進一退ヲ判斷スルニ最モ確カナル目標トナルモノデアアル。

(第六圖)

此ノ二ツノ罫線ヲ比較シテ見レバ、物價ハ騰貴ト勞働市場ハ好況トガ相伴フ現象デアアルコトガ分ル。凡ソ經濟界ニ於ケル機運ハ一高一低波狀的運動ヲナシ、沈滞ノ極點ハ凡ソ一定ノ周規律ヲ逐フテ回歸シ來ルモノデアアルガ、前掲ノ罫線圖ヲ見レバ、勞働市場ノ狀況ニ現ハレテ居ル經濟生活ノ波狀的運動ハ物價ノ波狀的變動ト伴フテ居ルノデアアル。而シテ其ノ一ガ互ニ他ノ原因デアリ、マタ結果デアアルコトハ疑ヲ容レナイ。

圖 六 第



(八)併シテ此兩者ノ間ニ其揆ヲ一ニセザル點モアル。一八七一年ヨリ一八九六年マデノ時期ニ於テ物價ハ年々機運ノ變轉ニ伴フテ上下シテハ居ルガ、シカモ其間物價變動ノ大勢ハ前圖ニ點線デ示シテアル通りニ下落ノ方向ヲ示シテ居ル。次ニ一八九六年ヨリ一九〇八年マデノ時期ハ確カナル結論ヲ得ルニハ短キニ失シテハ居ルガ、而モ其間物價變動ノ大勢ハ前トハ反對ニ上進ノ方向ヲ示シツ、アルモノト思ハレル。是ニ於テ經濟界ニ於ケル活氣ノ増進以外ニ最近物價ノ騰貴ヲ促シタ他ノ原因ガアルト云ハナケレバナラス。

前掲ノ罫線圖ハ小ニ過ギテ、最近ノ變動ヲ分明カニスルニ足リナイカラ、一八九三以來ノ指數ヲ示スベキ表ヲ次ニ掲ゲヤウ。

(第八表)(一九〇〇年ノ指數=一〇〇)

年次	就職指數	物價指數	年次	就職指數	物價指數
一八七三	九四六	一〇〇〇	一九〇四	九五一	九四三

一八九五	九六四	九二〇	一九〇三	九七四	九六九
一八九六	九六一	八八二	一九〇四	九六〇	九六三
一八九七	九九〇	九〇一	一九〇五	九七一	九七六
一八九八	九九五	九三三	一九〇六	九八七	一〇〇五
一八九九	一〇〇四	九三三	一九〇七	九八五	一〇五七
一九〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一九〇八	九三六	一〇三八
一九〇一	九六一	九六九	(一九〇九)	九三六	一〇四〇
一九〇二	九六二	九六五	一九一〇	九七三	一〇八八

之ニ據レバ、一八九三年ヨリ九九年マデ物價ハ一般ニ低位ニ在ツタガ、勞働市場ハ次第ニ好況ヲ呈シツ、アツタ。之ニ反シテ一九〇一年以後物價ハ變動ナク唯一九〇四年ニ至テ上騰シ始メタガ、其ノ四年間ニ勞働市場ハ次第ニ不況ヲ呈シタ。而シテ最後ニ一九〇六・七年ニ於テ就職率ニ變化ナクシテ、物價ハ著シク騰貴シ、一九〇八年ニ就職率ハ甚シク下ツタガ、物價ノ下落ハ左程甚シクハナカツタ。勿論吾々ハ此等ノ指數ヲ過重視スルコトハ出來ヌ、如何程丁寧ニ指數ガ計算シテアツテモ、二乃至三%位ノ變動

ニ依テ確乎タル斷案ヲ下スコトハ出來ヌ。ガ、年ノ數ヲ比較シテ見ルト、一般景氣ノ變動ト關係ノナイ、或ル他ノ原因ガ存シナケルハナラヌトスル推斷ガ強クナツテ來ル。

(九)然ラバ物價騰貴ノ他ノ原因ハ何デアルカ。之ヲ歴史ニ就テ見ルニ、物價騰貴ヲ以テ顯著ナル時期ガ今マデニ二ツアル。其一ハ十六世紀ノ後半デアルガ、當時物價ノ著シキ變動ヲ促シタ主要ナル原因ハ新世界カラ流れ來ル銀ノ増加ニ在ツタ。次ニ一八五〇年以後ノ物價ノ騰貴ガ大部分カリフォルニア及濠洲ニ於ケル金坑發見ノ結果デアアルコトハ異論ノナイ所デアアル。果シテ然ラバ、最近時ニ於テモ若シ同一ノ原因(金ノ存在量ノ増加)ガアレバ、同様ノ結果(物價ノ騰貴)ガ生ズルト斷ジテモ誤ハナイデアラウ(十)十九世紀ノ前年ニ於テ金ノ產出高ハ年々二乃至三百萬封度ニ過ギナカツタガ、一八五〇年以來カリフォルニア及濠洲ノ金坑發見ニ依テ二

千五百乃至三千封度ニ上ツテ、一八七〇年マデ持續シタ。其ノ產額ハ一八七〇年カラ一八九〇年マデ一旦減少シタガ、一八九〇年以後始メハ徐々トシテ、後ニハ次第ニ急激ナル速度ヲ以テ増加スルニ至ツタ。現ニ最重要ナル金產地ハトランスヴァールデアアル。南亞戰爭ノ結果一時其ノ產額ヲ減ジタガ、一九〇四年以來更ニ非常ナル勢ヲ以テ増加シ一九〇九年ノ產額ハ九千二百萬封度ニ達シテ居ル。即チ左表ノ通り

(第九表) 世界ニ於ケル金ノ產額

年次	百萬封度	年次	百萬封度
一八九〇	二四六	一八九八	五九五
一八九一	二七〇	一八九九	六二五
一八九二	三〇四	一九〇〇	六二三
一八九三	三六六	一九〇一	五一八
一八九四	三七五	一九〇二	五二二
一八九五	四一二	一九〇三	五九八
一八九六	四二一	一九〇四	六五九
一八九七	四九三	一九〇五	七五七

一九〇六

八一〇

一九〇八

八七二

一九〇七

八二七

一九〇九

九二一

貴金屬ノ供給増加ガ物價ニ及ボス影響ニ就テハ經濟學者ノ間ニ一定ノ説ガナイ。乍併本位貨幣ニ用ヒラル、金屬ノ供給ガ増加スレバ、取引ノ量ニ變化ナケレバ、平均一取引ニ受授セラルル貨幣ノ量ガ増スモノト云フテ誤ガナイヤウデアル。所ガ取引ノ量ガ常ニ同ジト云フコトハ決シテ無イノデ問題ハ困難トナル。金ノ產額ガ増セバ取引ハ自ラ頻繁トナリ、從テ貨幣ノ盡スベキ任務ハ増シテ來ル。ソシテ、ソレ丈ケ金產額ノ増加ガ物價ニ及ボスベキ影響ハ弱メラル、譯デアル。サリ乍ラ、今日ノ狀態ト前掲歷史の經驗トガ類似シテ居ルコトカラ考ヘテ見レバ、金產額ノ増加ガ物價ノ騰貴ヲ來シタコトハ殆ンド疑ヲ容レナイノデアアル。(尙後段參照)ケルンズハ嘗テ金產額ノ増加ニヨリテ生ズル物價ノ騰貴ハ製造品ヨリモ原料品ニヨリ多ク起ルモノナルコ

トノ證明ヲ試ミタ、而シテ其ノ理由トスル所ハ原料品ガ市價騰貴ノ刺戟ヲ受ケテ產額ヲ増スコトハ、シカク容易デナイト云フニ在ル。製造品ト原料品トノ市價ヲ別々ニ調査シタ統計ハ英國ニハナイガ、米國ノ Department of Labor ハ此種ノ調査ヲ試ミテ居ル。今其ノ數ニ據テ見レバ少クトモ米國ニ於テハ一九〇八年マデニ於ケル原料品ノ市價ノ騰貴ハ製造品ノ市價ノ騰貴ヨリモ著シイモノガアル。

然ラバ最近英國ニ起ツタ一八% (一九一〇年迄ニ於テハ二〇—二三%) ノ物價騰貴ヲ惹起シタ原因トシテ金ノ供給増加ガ如何程働イテ居ルカハ今日之ヲ決スルコトノ出來ナイ問題デアアル吾々が研究シテ居ル時限ハ一箇ノ現象ノ作用ダケヲ離シテ見ルニハ短キニ過ギル。故ニ今ノ所歷史ノ教フル所ニ照シテ推斷スルヨリ外ニ道ガナイ。十六世紀ニ亞米利加カラ來タ銀ノ流れハソレ迄歐羅巴ニ於ケル生産高ノ二十倍乃至二十

五倍ニ達シタ、而シテ夫レニ依テ生ジタ物價ノ騰貴ハ實ニ二〇〇%デアツタ。所ガ一八五〇年以後金ガ世界ノ支拂要具トナツテカラ、其ノ産額ハ從前ニ比シテ十倍ニ達シタガ、ジエヴォンスノ計算ニヨレバ物價ハ十八%騰貴シタ。此ノ二ツノ歴史上ノ實例ニ於テ産額増加ト物價騰貴トノ關係ハ同ジ比例ヲ保ツテ居ナイ。今此ノ差異ヲ如何ニ説明スルニシテモ、或ハ後ノ時期ニ於テハ既ニ貨幣トシテ流通シテ居ツタ貴金屬ノ量ガ前ヨリハ遙ニ巨額ニ達シテ居ツタカラト云フテ説明スルトモ、若クハ金屬貨幣以外ノ支拂要具ガ盛ニ使用セラル、ニ至ツタカラト説明スルトモ、兎ニ角貴金屬生産高ノ増加ガ一八五〇年以後ノ物價ニ及ボシタ影響ハ、一五五〇年以後ニ於ケル影響ヨリモ遙ニ微弱デアツタ。

而シテ其ノ後ノ半世紀間一方ニ於テハ金屬貨幣ノ流通高モ非金屬流通要具ノ使用モ遙ニ増加シタ。ガ他方ニ於テ一八五〇年以後世界ノ諸國

ガ銀ヲ本位貨トシテ使用セナクナツタコトハ物價ノ金産額ノ増減ニ對スル「感ジ」ヲ一層強カラシメタモノト云ヘル。今假ニ此二ツノ事情ガ相殺セラル、モノトセバ、金ノ産額増加ガ前ノ十倍ニ對シ今ハ三倍デアルカラシテ、最近時ニ起ツタ物價ハ十八「乃至二十」%ハ騰貴ノ中、金産額ノ増加ニ依テ惹起サレタ部分ハ凡ソ五「若クハ六」%ニ當ルト云フ意見ヲ、無論確實デハナイガ、一應ノ推斷トシテ公ニスルコトガ出來ルト思フ。

第三節 結論

以上ノ所論ヲ要言スレバ、最近時ニ於ケル物價ノ騰貴ヲ來シタ原因ガ三ツアル。

(一) 若干ノ重要商品ニ關スル特殊原因——即チ其ノ供給不足、

(二) 一定ノ時期ニ限ラル、一般的原因——即チ經濟界活氣ノ上進、

(三) 最近十乃至十二年間多少ノ度合ニ於テ凡

テノ商品ノ價ニ影響ヲ及ボシタ原因——即チ
金産額ノ増加、

是デアル。(彼ノ「トラスト」ノ影響ノ如キハ取リ
立テ、云フ程ノ價值モナイ。)以上三原因中前ノ
二ツハ一時的現象ト云フコトガ出來ル。第一ニ
概シテ云ヘバ供給ノ減少ヨリ生ズル市價ノ騰貴
ハヤガテ生産ノ増加ヲ促シ、之ニ依テ結局市價
ノ低落ヲ見ナケレバ止マナイ。第二ニ經濟界ノ
活氣モ亦永ク持續セラル、モノト云フコトハ出
來ヌ。而シテ第三ノ原因タル金ノ產出モ、ソレ
ガ何時マデ續イテドレ丈ケノ影響ヲ及ボスモノ
カ分ラス。今此ノ原因ハ尙ホ繼續シ重大ナル影
響ヲ及ボスモノト假定シ、次ニ起ル所ノ問題ハ
之ヨリ生ズル苦痛ヲ訴フルノ聲が高クナリ何等
カ救済ノ手段ヲ必要トスルニ至ルデアラウカト
云フコトデアル。之ニ對シ四十七年前ニゼヴオ
ンズノ答ヘタ所ハ今日ニ於テモ殆んど之ニ一句

ヲ加フルノ餘地モナイ。

ゼヴオンズノ云フ如ク『金ノ價ノ下落』(外ノ
言葉ヲ以テセバ、商品ノ價ノ騰貴)ハ概シテ『經
濟界ニ非常ニ喜ブベキ影響ヲ及ボスモノデア
ル。』近時英國モ米國モ——自由貿易國モ保護貿易
國モ——一九〇七—八年ノ恐慌ノ結果カラ目ニ立
ツテ早く回復スルコトノ出來タ所以ハ、南亞ヨ
リスル金ノ流レガ齎ラシタ作用ト見ルヨリ外ニ
説明ノ仕様ガナイ。之ガ爲メニ經濟社會ニ企業
心ノ漲リ來ルノ利益ニ比ベテ見レバ、定額ノ所
得ニ衣食スル人々ガ被ル不利益ノ如キハ甚シク
其ノ重要ヲ失フニ至ルノデアル。

之ニ反シテ其ノ高ガ絶對ニ定マツテ居ナイ種
類ノ所得ハ、次第二新ナル物價ノ平準ニ順應シ
テ變化シ行クモノデアル。尤モ此ノ順應ノ圓滑
ニ行ハル、ヲ妨グル原因ガナイデハナイ、之ガ
爲メニ生ズル困難ハ前ニ述べタ利益ヲ或ル程度

マデ少ナカラシメザルヲ得ナイ。十六世紀ニ於テ賃銀ハ圓滑ニ一般物價ノ變動ニ伴フコトガ出來ナカツタ爲メニ、勞働者ノ生活ノ程度ハ低メラル、ニ至ツタ。乍併十九世紀ノ勞働者ハ克ク自ラ助クル所以ノ道ヲ解シタ。彼等ハ同盟罷業ノ手段ニ依テ高キ賃銀ヲ得ルコトガ出來タ。蓋シ勞働ニ關スル爭鬭ハ幾分カハ金坑ノ發見ガ齎ラシタ物價騰貴ノ一結果ト看ルベキモノデアアル同盟罷業ガ功ヲ奏シタコトハ頗ル多イガ、シカモ社會的ノ激怒ヲ後ニ遺スヲ免ル、コトヲ得ナイ。今日勞働者ノ勢力ハ頗ル強大ナルモノガアル。英國ノ如キ充分ナル團結ノ出來テ居ナイ獨逸ニ於テスラ、一八九五年カラ一九〇八年マデニ生活費ガ二十七%騰貴シタニ對シテ、賃銀ガ三十九%以上騰貴シタ例モアル。

團體的賃銀協定ガ賃銀ヲシテ物價ノ變動ニ伴ハシムル手段デアアルコトハ今ハ一般ニ知ラレタ事實デアアル。現今此ノ手段ノ充分ニ利用セラルルコト英國ノ如キ國ハナイ。而シテ之ガ爲メニハ團結鞏固ニシテ訓練ニ富ム職工組合ノ運動ガ物價向上ノ時期ニ於テ殊ニ必要デアアル。彼ノ一二階級戰爭ノ學說ニ心醉シテ經濟界ニ於ケル機運ノ變轉ヲ充分ニ顧慮スルコトナク、經濟上ノ事件ト政治的事件トヲ混同スル革命的職工組合ノ運動ノ花々シキ、以テ多數ノ人ノ眼ヲ眩惑スルニ足ルモノガアル。又時ノ形勢ガ勞働者ニ利アル場合ニ際シテハ團體的賃銀協定ハ煩ハシイ手段デアラウ。ニモ拘ハラズ吾々ハ今日尙ホ賃銀協定ヲ研究ノ外ニ置クコトヲ許サナイ、其目的ヲ達スルニ之ニ優ル有功ナル手段ガ見出サレザル限り賃銀協定ハ恐ラクハ一層盛ニ行ハル、ニ至ルデアラウ。(完)